よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

38

よろこびの知らせ
第38集

目　　次

ともに死にともに生きる …… 1
コロサイ 2:11-15

キリストが来られるとき …… 10
コロサイ 3:1-4

ゲラサ人の地で …… 19
マルコ 5:1-5

キリスト者の装い …… 28
コロサイ 3:12-14

ここに収められたメッセージは、2022年10月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2022, Philip Nakao

ともに死にともに生きる
コロサイ 2:11-15

2:11 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。
2:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。
2:13 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、
2:14 いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。
2:15 神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。

皆さんは、バプテスマを受ける前に、バプテスマの意味について学んだことと思います。けれども、振り返ってみると、「あのときは、バプテスマについて何も理解できていなかった」と感じる人がほとんどだと思います。私も、バプテスマを受けるときには、イエス・キリストが私の救い主であることを堅く信じていましたし、バプテスマの後、言いようもない喜びが心に湧いてきましたが、その時、バプテスマが意味することをきちんと理解していたわけではありませんでした。バプテスマを受けたあとで「私が受けたバプテスマにはこんな意味があったのか」と、徐々に理解するようになりました。バ

プテスマの意味は、バプテスマを受けることによって理解でき、バプテスマを受けたあとで分かるようになるのです。ですから、聖書は、すでにバプテスマを受けた人々に対して、くりかえしバプテスマの意味を説いてるのです。私たちも、くりかえし、バプテスマについて学び、バプテスマによって与えられている恵みを確認し、それを感謝したいと思います。

一、罪の赦し

では、バプテスマにはどのような意味があるのでしょうか。それは私たちに何を示しているのでしょうか。三つのことを学びましょう。

第一は「罪の赦し」です。13 節に「それは、私たちのすべての罪を赦し…」とある通り、バプテスマは「罪の赦し」の恵みを示すもの、その「しるし」です。

ペテロはペンテコステの日に、集まったユダヤの人々にこう言いました。「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」（使徒 2:36）ペテロの説教を聞いていた人々の中には、ピラトがイエスを赦そうとしたとき、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫んだ人たちもいたことでしょう。救い主を退け、死に追いやるという大きな罪を犯しました。しかし、ペテロは、その罪もまた、イエスを信じてバプテスマを受けるなら赦されると約束しました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただ

くために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。」（使徒 2:38）

パウロは、もとは教会を迫害する者でした。しかし、キリストに出会い、信じる者となりました。そのパウロにアナニヤはこう言いました。「さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。」（使徒 22:16）キリストを信じる人々に鞭をふるい、縄で縛り上げて牢獄に閉じ込めることは、つまりは、キリストご自身に鞭をふるうことでした。しかし、そのような罪も、イエスはバプテスマによって赦してくださったのです。

コリント第一 6:9-11 にこうあります。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」多くの罪が並べられています。コリントの教会には、イエス・キリストを信じる前にそのような罪にかかわっていた人もいました。しかし、それがどんな罪であっても、イエス・キリストを信じてバプテスマを受けたとき、それらの罪は洗い流され、赦されたのです。だから、イエス・キリストを信じ

る前の罪の生活に戻ってはいけないと、教えられているのです。罪を赦された恵みを、ほんとうに知っている人は、簡単に同じ罪に戻っていくことはありません。「私はバプテスマを受けた者」、「罪を赦された者」、このことを覚え、感謝するとき、私たちは、次の段階、「罪からの解放」に進むことができるのです。

二、罪からの解放

バプテスマは、第二に「罪からの解放」を表しています。13 節の後半から 14 節にかけてこう書かれています。「それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」「私たちを責め立てている債務証書」とは、何でしょう。それは「律法」を指しています。律法とは、神が人類のために定めたルールのことです。律法は人がしあわせに生きることができるために、なすべきことを命じ、してはいけないことを禁じるものです。もし、私たちが律法が命じることを守り、律法が禁じることから遠ざかっているなら、律法は私たちにとって喜ばしいものとなります。しかし、律法が禁じていることをしてしまい、律法が命じていることを行っていないなら、同じ律法が私たちを責めるものになるのです。

聖書では、罪を「負債」（借金）に例えています。私たちは罪を犯すたびに、罪という借金を増やしていることになります。そして、律法がその借金を支払うように

と責め立てる「債務証書」となるのです。この罪の借金はあまりにも大きく一生かかっても返すことなどできません。私たちは生涯、いや、永遠にその債務証書に責め立てられるはずでした。

しかし、あわれみ深い神は、私たちの罪の負債を、イエス・キリストの命によって支払ってくださいました。それが、あの十字架です。ひとたび借金が支払われたら、債務証書は効力を失います。コロサイ 2：14 に「神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました」と書かれているのは、そのことを言っています。イエスは、私たちが罪の負債から解放されるために、ご自分の命を「代価」にし、すべての負債を支払い、十字架によって債務証書を無効にされたのです。

14 節では、罪からの解放が「負債」とその「返済」という経済的なことに例えられていましたが、15 節では、軍事的なことに例えられています。「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」ローマはもとは小さい国だったのですが、同盟国を守ることによって勢力を広げ、大きな帝国となりました。同盟国が侵略されたり、人々が捕虜や奴隷になったりすると、ローマ軍が出動し、捕虜となった人々を解放するだけでなく、逆に侵略した国の人々を捕虜にし、「さらしもの」として凱旋の行列に加えました。今、捕虜に対してそんなことをしたら国際問題になりますが、当時はそのようにして、ローマの力を示し、あの「ロー

マの平和」が行き渡ったのです。ここでは、イエス・キリストが凱旋将軍にたとえられています。イエス・キリストはその復活によって罪と死、また、私たちを罪に縛りつけているこの世の力、また、その背後にある霊的な力を滅ぼし勝利されたこと、それらを捕虜にして、勝利を宣言しておられることが言われています。愛に満ちたイエス・キリストの恵みによって、私たちは罪を赦されたばかりでなく、勝利の主イエス・キリストによって、私たちを束縛し、苦しめる罪の力からも解放されるのです。バプテスマは、この解放のしるし、勝利のしるしです。

マルチン・ルターは、宗教改革の戦いの中で、何度も落胆や誘惑に悩まされました。しばしば悪魔の幻を見ました。ルターがそれに向かってインクの瓶を投げつけたために、彼の書斎の壁にそのシミが残っているのだそうです。信仰の確信を失ったとき、ルターはチョークをとって、机に “Ich bin getauft.”（「私はバプテスマを受けている」）と書いたといわれています。ルターは自分の感情ではなく、「バプテスマを受けている」という事実に戻りました。バプテスマが意味しているイエス・キリストの救いの確かさに立ち返ったのです。私たちも、バプテスマの意味することをしっかりと心に刻み、イエス・キリストの勝利を自分のものにしたいと思います。

三、罪に死に、新しい命に生きること

バプテスマが表す第三のことは、私たちが「キリストとともに死に、キリストとも生きる」ようになったこと

です。12 節に、「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです」とある通りです。「キリストとともに死に、キリストとも生きる。」とても、神秘的な響きがする言葉ですが、基本的には、「キリストとともに死ぬ」とは罪に対して死ぬこと、「キリストとともに生きる」とは、神の子どもとして生まれ変わり、新しい人生を歩むことを意味しています。「浸礼」の場合、バプテスマを受ける人は全身を水に沈められます。これは、その人の古い罪の性質が死んだことを表します。そして、水から上がって来ることは、復活し、神の子どもに生まれ変わったことを表すのです。

　イエス・キリストを信じる者は、罪に死んで、新しい者になりました。けれども、私たちはバプテスマを受けたあとも、自分の中に罪が残っているのを見て、がっかりすることがあります。赦され、解放され、死んだはずの罪がよみがえってきたかのように感じるのです。はたして自分は救われているのだろうかと心配になってきます。けれども、それは、むしろ、救われた証拠です。救われる以前は、罪を罪として感じることがありませんでした。自分の罪を認め、それを悔い改めることができるのは、神の子どもとしての性質を与えられたからです。古い自分にしがみつくことをやめ、新しくされた自分に生きること、神の子どもとして、キリストにならう者へと成長していくことを目指していけばよいのです。

罪に死ぬことも、キリストにならって生きることも、自分でできることではありません。ある著名な僧侶が「死んだつもりになれば、何だってできるし、道は必ず開かれます」と言っていました。また、多くの人が「私は、これから生まれ変わって、正しく生きていきます」と決心します。その決心は尊いものですが、そう決心したとたんに、それとは違うことをしてしまい、決心したことを続けられないというのが現実です。古い自分に死に、新しい自分に生きる。それは、キリストなしにはできません。私たちがキリストに結ばれるときはじめて、私たちはキリストとともに十字架につけられ、キリストとともに葬られ、そして、キリストともに復活することができるのです。私たちの罪のために死なれたお方、よみがえって今も生きておられるお方によって、私たちは新しい人生を生きることができるようになるのです。

このイエス・キリストと私たちを結びつけるものが「信仰」です。もう一度12節を読みましょう。「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」ここには、「バプテスマ」、「キリスト」、「信仰」の三つの言葉があります。これは、「バプテスマ」は「イエス・キリスト」を示しており、イエス・キリストを「信じる」とき、私たちは信仰によってキリストに結び合わされて、新しい歩みができることを教えています。「キリストとともに死に、キリストとと

もに生きる。」このことは頭だけで理解できるものではありません。バプテスマの意味を知り、日々の生活でそのことを覚え、キリストに信頼することによって、はじめて分かるものなのです。

「罪の赦し」、「罪からの解放」、「罪に死に、新しい命に生きること」、これらはみな、イエスが私たちのために成し遂げてくださり、信じる者に与えてくださった大きな恵みです。バプテスマはこの恵みを確かなものにし、私たちにその恵みを確信させてくれます。これからバプテスマを受ける人はそれによってこの恵みを体験してください。すでにバプテスマを受けた者は、バプテスマの意味を学び直すたびに、これらの恵みをより深く体験し、より大きな感謝をささげていきたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちの信仰の歩みはバプテスマから出発します。そして、バプテスマは常に私たちにキリストを指し示し、私たちをキリストに結びつけます。「キリストとともに死に、キリストとともに生きる。」このことを、信仰によって受けとめ、日々の生活の中で体験できますよう、導き、助けてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

キリストが来られるとき
コロサイ 3:1-4

3:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。
3:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。
3:3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
3:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

一、天を見上げる

ギリシャ語で「人間」は「アンツローポス」といい、それには「上を見る者」という意味があります。他の動物は四足で、地面を見ながら歩きますが、人間は二本足で立ち、空を仰ぎます。人間と動物は見た目も違っていますが、なにより、内面が違います。人間が「上を見る」という場合、それは、よりよいものを求める「向上心」を指し、何よりも、この世界と人間を創造されたお方を見上げる「信仰心」を意味しています。

まことの神を知らなくても、多くの人は「天」の「意志」や「力」を感じながら生活しています。古代の人々も、地を照らす太陽と、天から降る雨が地に実りを与えることを知っていました。日照りが続けば作物は枯れ、雨が多すぎても収穫を得ることはできません。それで、人を生かす糧は地からとれるものですが、それを与える

のも、与えないのも天が決めるのだと感じていました。

詩篇 121:1-2 に「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る」とあります。昔の日本人は、高い山を見上げると、その山のふもとに鳥居を立て、山そのものを拝みました。雨雲が山から湧き出て、田畑を潤す様子を見て、山を神々のひとつと考えたのです。しかし、まことの神を知っていたイスラエルの人々は、山の上に広がる天を見上げ、その天をも、山をも、地をも造ってくださった神を見上げました。山に雨や雪を降らせ、それが川となって野に流れ、草木を茂らせ、あらゆる生き物を生かし、人々を養いますが、それらすべては、神の人への恵み、あわれみによるのです。

エジプトから脱出したイスラエルの人々は、約束の地に向かうのに、荒野を通って行きました。それで、人々はたちまち食べる物に困りはじめました。神は、イスラエルが荒野にいる間、毎朝、「マナ」という食べ物を天から降らせ、ご自分の民を養ってくださいました。イスラエルの人々は、自分たちを生かし、養うものが、自分たちの努力によって地から収穫したものによってではなく、天からの神の恵み、祝福によることをを学びました。

ところが、神の民は、物質的に豊かになると、神への信仰を失くしてしまい、「この豊かさは、自分たちの努力によって勝ち取ったものだ」と考えるようになりました。神の恵み、祝福に感謝することを忘れてしまったの

です。それで神はこう言われました。「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。――万軍の主は仰せられる。――わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」（マラキ書 3:10）今あるのは神の恵みによることを知って、感謝する。たとえ今、足らないものや苦しみがあったとしても、神は必ず必要なものを与えてくださる、苦しみ、悩みから救ってくださる。そのことを信じて、神に願い求めるなら、神は「天の窓」を開いて祝福を注いでくださいます。

古代から礼拝は「天の窓」と言われてきました。礼拝を通して、天を見上げ、天を思うことができるからです。私たちも、この礼拝を「天の窓」としましょう。そこにおられる愛に満ちた神を見上げましょう。そして、「天の窓」から注がれる恵み、祝福に満たされ、礼拝から帰りましょう。

二、天におられるキリスト

さて、コロサイ人への手紙は、3:1 に、「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます」とあって、私たちが天を見上げるのは、そこにキリストがおられるからであると言っています。いや、キリストがそこにおられるだけでなく、私たちも、キリストと一緒にそこにいるのだと教えています。

1節の「あなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら」とは、神が、イエス・キリストを信じる者を、その罪とともにいったん葬り去り、罪を赦し、きよめ、よみがえらせてくださったことを言っています。これは、信じる者が神の子どもとして生まれかわること、「ボーン・アゲイン」と同じことです。ペテロ第一 1:3 にもこうあります。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」

復活した者、新しく造られた者、神の子どもとして生まれかわった者、それが「クリスチャン」です。「クリスチャン」というと「キリストを信じる者」のことと考えられています。確かに、クリスチャンはキリストを信じる者です。神の御子が私たちの救い主となるため、人となって世に来られたこと、全人類の罪を背負い十字架で命を献げられたこと、十字架から三日目に復活されたこと、そして、今、天で父なる神の右の座について、そこで私たちのためにとりなしておられることを信じています。そう信じて、その信仰によって救われました。しかし、「クリスチャン」という言葉には、ほんらいは、「キリストにある者」、キリストと結ばれ、キリストとひとつにされた者という意味があります。ですから、キリストが十字架で死なれたとき私たちも死に、キリストが葬られたとき私たちも葬られ、キリストが復活された

とき私たちも復活し、キリストが天に帰られたとき、私たちも天に昇ったのです。エペソ 2:4-6 にこうあります。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」「クリスチャン」とは、「キリストを信じる者」というだけでなく、「キリストにある者」であり、キリストとともに死に、キリストともによみがえった者なのです。

みなさんは、そのことを信じていますか。イエスが十字架で死なれたのが、私の罪のためであり、復活されたのが、私の救いのためであることさえ、信じるのに難しかったのに、じつは、私はイエスとともに死んだ者なのだ、イエスとともに復活した者なのだと信じるのは、簡単なことではありません。今、現に、この地上に生きている私がどうして、イエスとともに天の座にいるのか、そんなことは、想像さえできないことです。確かに、それは、五感で感じることができるものではありません。しかし、信仰とは、目に見えないものを、神の言葉によって信じることです。天を見上げ、そこにおられるキリストを思うとき、私たちは、この真理を見ることができます。

私は自然豊かな場所で宿泊するとき、決まって夜空を仰ぎます。子どものころ、ふつうに見ることができた天

の川やたくさんの星をもう一度見たいと思うのです。古代の人たちは夜になると、降ってくるような星空を眺めていたのでしょう。同じように天を見上げていても、昼と夜では天空は違って見えます。もちろん、夜になって急に星が生まれるわけではありません。夜も昼も星はそこにあるのですが、昼は太陽の光のためそれが見えないだけなのです。夜になって太陽の光が遮られると、地球が無数の星に取り囲まれているという現実が見えてきます。信仰によってものごとを見るというのは、夜になって現れる星を見るようなものです。そこにあっても、今まで見えなかったものが、神の言葉と、聖霊の働きによって見えてくるということです。

天を仰いでキリストを見上げるとき、私たちはそこにおられるキリストを見るだけでなく、キリストとともにあり、キリストの内にある自分をも見るのです。過去の自分の姿ではなく、キリストにあって、罪を赦され、神の子どもとして愛され、新しくされている自分を見るのです。信仰によってキリストを受け入れても、キリストにある自分を発見することができず、仁を受け入れることができていない人もありますが、キリストにあって新しくされている自分を受け入れる者は、どんなに過去の自分に失望していたとしても、そのこだわりを捨てて、新しい歩みへと導かれるのです。

三、天から来られるキリスト

私たちが上を見上げ、天を思うとき、そこにキリストとキリストにある自分を見るのですが、さらに素晴らし

いことは、その天からイエス・キリストがもういちど、この世に来られることです。そのとき、すでにキリストにあって新しくされているのですが、それが完成するのです。

私たちは、神の御子が私たちの救い主となるため、人となって世に来られたこと、全人類の罪を背負い十字架で命を献げられたこと、十字架から三日目に復活されたこと、そして、今、天で父なる神の右の座について、そこで私たちのためにとりなしておられることを信じています。そればかりでなく、キリストが、天から再び地に来られることも信じています。これを「キリストの再臨」（Second Coming）と言います。「キリストは死なれ、よみがえられ、再び来られる。」（Christ has died, Christ is risen, Christ will come again.）　これは「信仰の奥義」（*mysterium fidei*）といって、古くから礼拝で唱えられてきた言葉です。

今日、世界は世の終わりに向かって急速に進んでいます。最近、ディヴィッド・ジェレマイヤ牧師が “The World of the End”（終わりの世界）という本を出しました。先生は聖書の預言に基づいて、これからの世界が「欺き」の世界に、「戦争」の世界に、「災害」の世界に、「迫害」の世界に、「裏切り」の世界に、「不法」の世界に、「悪い知らせ」の世界に、「終わり」の世界になっていく。しかし、クリスチャンは「正直」であり、「落ち着いて」生活し、「確信」を失わず、「備え」をし、「忠実」で、「親切」で、「良い知らせ」を

語り、「動かされない」者であれと勧めています。ジェレマイヤ先生はこの本の 9 つの章のタイトルに「希望」という言葉を使っていませんが、聖書の「預言」は「希望」です。単なる警告だけでなく、常に希望を語っています。キリストを信じない人にとって、これから起こることは「世の終わり」に導く絶望的なことであっても、キリストを信じる者には、それら一つひとつは「神の国の始まり」に導くものです。キリストを信じる者は、どんなときも希望を失くしません。

キリストが来られるとき、私たちはどうなるのでしょうか。コロサイ 3:4 に「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます」とあります。これは、ヨハネ第一 3:2 では、こう言いかえられています。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」

コロサイ人への手紙をここまで読み進んでくると、コロサイ 1:27 の「この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです」という言葉の意味が分かってきます。キリストを信じる者は、「キリストにある者」ですから、キリストの内にいるのです。そして、それと同時に、キリストは信じる者の内におられ、その人を生かしておられるのです。キリストのいのちに

生かされている者は成長し、キリストに似た者になっていきます。この成長、成熟のプロセスは、キリストが再び来られるとき完成します。私たちはキリストと同じ、栄光の姿に変えられるのです。これが「栄光の望み」でなくて何でしょう。この「望み」、「希望」が、終わりの時代にも、私たちを支えます。人を絶望にしか導かない罪の生活から、神の愛と祝福を受け、希望に生きる生活へと導かれましょう。

（祈り）

父なる神さま、世の中は、私たちを失望させることばかりで満ちています。しかし、あなたはキリストにある希望、いや、キリストご自身を私たちの栄光の望みとして与えていてくださいました。私たちは目を上げ、天を思います。そこからイエスが来られ、私たちも栄光に変えられる日を待ち望みます。この希望にふさわしく生きる私たちとしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

ゲラサ人の地で
マルコ 5:1-5

5:1 こうして彼らは湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。
5:2 イエスが舟から上がられると、すぐに、汚れた霊につかれた人が墓場から出て来て、イエスを迎えた。
5:3 この人は墓場に住みついており、もはやだれも、鎖をもってしても、彼をつないでおくことができなかった。
5:4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまったからで、だれにも彼を押えるだけの力がなかったのである。
5:5 それで彼は、夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた。

一、闇の世界

1 節に「こうして彼らは湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた」とありますが、そこは、「ゲラゲサ」と呼ばれていた町だと思われます。ユダヤでは決して飼われることのないブタが飼われていたことから分かるように、そこはまったくの異邦人の地でした。ガリラヤ湖の東側は、西側とは全くの別世界で、人々はまことの神を知らないまま過ごしていました。

ユダヤの人々は「自分たちこそ神の民だ」と自らを誇り、異邦人と呼ばれる人々を軽蔑していましたが、当時のユダヤ人は不信仰で、他の人々に対して誇れるような状態ではありませんでした。けれども、ユダヤ人には、他の人々よりも優れたものがひとつだけ残されていました。それは、唯一のまことの神を知っていたということ

です。ユダヤには、神を知る知識の光がありましたが、他の国々は霊的には暗黒でした。ゲラサ人の町は、ユダヤの国のすぐそばにありながら、真理の光のない暗闇の世界でした。

まことの神を知らず、暗闇の中にいるのは、イエスの時代の人々だけではありません。こんなに教育が進み、情報伝達が発達している現代でも、まことの神を知らない人が大勢いるのです。昨年のピクニックで、韓国から来たひとりの姉妹が「ずっとキリストの福音を聞いたことがなかった」と話していました。韓国のようにクリスチャンが大勢いて、教会もたくさんある国でも、そうなのかと驚きました。興味や関心がなければ、どんなに情報があふれていても、クリスチャンの善い行いを見ても、証しを聞いてもそれが心に留まることがないのです。

アメリカの南部は「バイブル・ベルト」と呼ばれ、クリスチャンが多く、教会の盛んなところです。とくに、テキサスは「バイブル・ベルトのバックル」と言われるほど、しっかりした教会が多くあるところです。けれども残念に思うのは、韓国語や中国語、ベトナム語やラーオ語の教会が成長しているのに、同じアジアでも日本語の伝道がほとんど進んでおらず、日本語を話すクリスチャンの数も、教会の数も少ないままだということです。教会のクリスマスやイースター、VBS などの催しの案内に触れ、教会の幼稚園やデー・ケアに子どもを預けている人も少なくないのに、多くの日本人は、福音に対

して心を閉ざしているのです。こんなに福音の光にあふれている環境の中にありながら、まだ闇の中に閉じこもっている人が大勢いるのです。

二、死の世界

暗闇では暗闇の力が働き、悪霊たちが力をふるいます。この町の墓場に、悪霊に憑かれた人が住んでいました。この人は人の心を失い、他の人々と隔離され、何の目的もなく朝から晩まで墓場の中を歩き回わっていました。皆さんは、この人のことを考える時、恐ろしいと思いますか、それとも哀れに思いますか。あるいは、自分たちに関係のない物語だと思いますか。私は、この人の姿は、現代の私たちの姿そのものだと思うのです。もちろん、みんながこの人のように狂った生活をしているわけではありません。しかし、普通の生活をしていても、人の心を失い、他の人と真実な関わりを持つことができず、何の目的もなく人生を送っている人々が多くいるように思います。聖書の光に照らすとき、この人とイエスを信じる以前の私たちとにいくつかの共通点があることに気付きます。

第一に、この人も以前の私たちも霊的に死んでいました。この人は墓場に住んでいました。墓場というのは、生きた人間の住むところではなく、死人の住処です。生きた人が死人の住処にいる。これは、この人が「生きながらの死人」であったことを意味しています。身体は生きていても霊的には死んだ者でした。聖書は、生きる意味や目的を見失っている状態、人間として本来あるべき

姿を失っている状態を霊的に死んだ状態だと言っています。たとえ、多くの知識があり、仕事をする能力があり、立派な行いができたとしても、霊的に死んでいる人は、神が私たちに与えてくださった本来の生き方をすることができないのです。

戦後、日本にアメリカ軍が駐留していた時のことです。ひとりのアメリカ兵が日本で一番立派な自動車に乗りたいと思いつきました。いろいろな自動車を探したのですが、アメリカにあるような立派な車はありませんでした。ところがある日、アメリカのキャンピング・カーのようなものを見つけました。屋根や窓がついていて、しかもそれが日本の古代建築のようになっていました。金色の装飾が施され、それはアメリカのどんなキャンピング・カーよりも豪華なものでした。このアメリカ兵はその車がたいへん気に入って、「ぜひこれに乗りたい」と掛け合いました。車の持ち主は「これは普通の人は乗れないんです」と渋ると、「普通の人が乗れないなら、なお、乗ってみたい」とそれに乗りました。天井が低いので寝そべって乗り、窓からＶサインを出して町を一周したというのです。お分かりですね。このアメリカ兵は霊柩車に乗って町をひとまわりしたのです。これは笑い話ですが、現代の多くの人々は、死人を乗せる乗り物に乗って、墓場に向かうような生活をしているのかもしれません。それでいて、自分の姿に気付いていないとしたら、それほど不幸なことはありません。

第二に、この人も以前の私たちも自分の力以上のもの

に支配されていました。この人は自分の意志や理性でなく、悪霊の力に左右されていたのです。自分では、自由、気ままに生きているつもりでいたのでしょうが、実は、悪霊に縛られていたのです。聖書は、神から離れた人は、自分以上の霊的な力に縛られていると教えています。エペソ 2:1-2 に「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました」とあります。これは私たちが悪霊憑きであったと言っているのではありません。「悪霊に憑かれる」というのは完全に悪霊の支配にある状態を言います。けれども、キリストによって解放されるまで、私たちはなんらかの形で悪霊の影響のもとにあったのです。ドラッグやアルコール、ギャンブルなどにのめりこんでいる人を見ると、その人たちが、その人たち以上の力に支配されていることがよく分かります。アルコール依存症の人は「酒を止めようと思えばいつでも止められる」と言うのですが、実際は酒にコントロールされていて、自分では止めることができないでいるのです。劣等感や虚栄、ひがみやねたみ、怒りや思いわずらいといったものに束縛されている人もなんと多いことでしょうか。

第三に、この人も以前の私たちも自分で自分を傷つけていました。聖書は、この人は「石で自分のからだを傷つけていた」と書いています。文明の歴史は「石器時代」、「青銅器時代」、また「鉄器時代」に区分されま

すが、この人が持っていた「石」は人類が最初に手にした道具で、文明や科学技術を表わします。人間は、他の動物のような腕力も、脚力もありませんが、道具を使うことによって、何万頭もの馬でなければ引っ張ることができないような重いものを動かすことができるようになりました。機械が人間の腕力の代わりをし、今ではコンピュータが人間の頭脳の代わりを果たすようになりました。科学技術は、人間の心の領域にまで入りこみ、人間がどんどん非人間化されているのを、私たちは目にしています。

どの子どもも携帯電話を持つ時代になりました。親は、それによって子どもと連絡が取れるので、安心していますが、携帯電話によって子どもが犯罪に巻き込まれたり、いじめを受けたりすることもあります。テキスト・メッセージに5分以内に返事を返さなかった、返事に絵文字を使わなかったというのでいじめられるのだそうです。子どもたちは仲間はずれにされないために、一日50通ものメールのやりとりをして、勉強したり、遊んだりする時間が無くなり、夜ふかしして身体を壊しています。携帯電話は、この墓場に住んでいた人が手に持っていた「石」のようなものかもしれません。人間は、今も、文明の道具によって自分を傷つけているのです。そして、自分を傷つけ、それが癒やされないでいる人は、思わぬ瞬間に人を傷つける言葉を口にしたり、とんでもない行動をしてしまい、人を傷つけるのです。そして、人を傷つけると、それを悔やんで、自分もそれによって

傷つくようになります。

生きながら死んでいる、身勝手に生きているようで縛られている、そして自分を傷つけ、人を傷つける。それは、遠い昔のゲラサの人だけではなく、現代の私たちも同じだと思います。

三、救い

神から遠く離れ、悪霊にとりつかれ、人を傷つけ自分を傷つけているこの人はどうやって救われるのでしょうか。この人には何の希望もないように見えます。「希望を持て」と言っても無理な状態です。しかし、イエス・キリストが、この人のところに来られました。イエスはユダヤ人の誰もが、汚れた土地として足を踏み入れなかったゲラサ人の地に、ご自分の方から来てくださいました。その町の人たちさえも恐れて近づこうとしなかった墓場にまでイエスは足を踏み入れました。ここに救いの希望があるのです。

イエスは、救いを必要とする人々をいつも心に深く留め、その人の所に来てくださいます。イエス・キリストは救いを必要とする人がどこにいるかご存知で、どこにいようと、その人がいる所まで来てくださるのです。イエスはユダヤ人の誰もが嫌っていたサマリヤの町にわざわざ行かれました。サマリヤのひとりの女性が救われるためでした。エリコの町に行かれた時には、その町で一番の嫌われ者ザアカイの家に泊まりました。ザアカイが救いを求めていたからです。十字架にかけられた犯罪人の一人が死の間際にイエスを信じましたが、イエスはこ

の人を天国に導くため、その人の隣の十字架にかかられたと言うことができるでしょう。

イエスは、この墓場に住む人から悪霊を追い出し、この人を全く正気に返してくださいました。しかし、町の人たちはイエスに町から立ち去るよう願いました（17節）。この人から追い出された悪霊たちがブタに入ったため、二千匹ものブタが崖から湖に突進して、溺れ死んだからです。町の人たちは、この人が悪霊から解放されたことを喜ぶよりも、失くしたブタを惜しみました。イエスがたったひとりを救うためであっても、ユダヤからこの地まで来られた、その愛を、この町の人たちは理解できなかったのです。

正気に戻ったこの人は、イエスのお伴をしたいと申し出ましたが、イエスは、彼に言われました。「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」（19節）この言葉は、この人に新しい使命を与えるものでした。彼は、それまで墓場を歩き回るだけの無意味な人生を過ごしていました。しかし、イエスに出会い、イエスによって救われ、本来の自分に立ち返ったとき、イエスから使命を与えられました。意味ある人生をその日から始めたのです。20節に「そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で言い広め始めた」とあるように、彼は、自分の家族のもとに帰り、その町で、イエスが自分にしてくだ

さったことを言い広めました。

マルコ 7:31 に「それから、イエスはツロの地方を去り、シドンを通って、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に来られた」とあります。そしてそこで数多くの癒やしをなさったことが、マタイ 15:29-31 にも書かれています。イエスはデカポリスで多くの人々に伝道することができたのですが、その背後には、イエスから悪霊を追い出してもらったこの人の証しがあったのです。イエスは、ゲラサ人の地で、たった一人の人しか救うことができませんでした。しかし、この一人の人の救いが多くの人々への救いへと広がっていったのです。イエスによって自分一人が救われただけでなく、その救いが他の人へと広がっていく人生。それは、なんと幸いで、意味のある人生でしょうか。私たちも、イエスの救いを受け入れ、それを言い広める幸いな人生を送りたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、御子イエスを「世の光」として世に送ってくださいました。そして、「いのち」であるイエスによって私たちを死から命へと移してくださいました。どうぞ、多くの人が私たちを救おうと、私たちのところに来てくださったイエスを認め、信じ、受け入れることができますよう、導いてください。この救いを受けた私たちを、この暗い時代の「光」として用いてください。人を生かす「いのちのことば」を分かち合う者としてください。主イエスのお名前で祈ります。

キリスト者の装い
コロサイ 3:12-14

3:12 それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。
3:13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。
3:14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。

一、古いものと新しいもの

コロサイ人への手紙は、1 章と 2 章で、イエス・キリストが神の御子であり、あらゆるものの上におられる第一のお方であることを教えています。そして、この神の御子が私たちを救うために十字架で死なれ、復活されました。それによって、信じる者もまた十字架で罪に死に、キリストの復活によって新しい人に生まれ変わったことを明らかにしています。

3 章からは、イエス・キリストを信じる者の「生き方」（生活）が具体的に教えられています。しかし、それはたんに「こうしましょう」、「ああしましょう」というものではありません。私たちは、正しいこと、良いこと、望ましいことが何かを知っています。しかし、知っているのにそれができない、したいと思うことができないで、したくないことをしてしまう、そうしたジレンマを抱えています。それは罪が引き起こすジレンマで、私

たちの力で解決できないものです。

百年も前のこと、いわゆる発展途上の国に派遣された宣教師が人々の衛生状態が良くないのを見て、村の人たちにこう言いました。「いいかね、家の中にあるものを、よく水で洗うんだ。とくに床は水を撒いてゴシゴシこするんだよ。」すると、村の人が言いました。「そんなことをしたら、家の中が泥だけになっちまうよ。わしらの家の床には石も木も敷いていない、地べたのままだからな。」この話の意味はお分かりですね。地面に水を撒いてこすっても、泥だらけになるように、古い自分をいくら磨き上げても、そこから新しい生活は生まれないのです。古い人が死に、新しい人となって復活するのでなければ、新しい生活は生まれません。ですから聖書は、信仰者の生活について教える前に、常に、イエス・キリストがどのようなお方であり、私たちのために何をしてくださったか、イエスを信じる者がどのように変えられたのかを教えるのです。

キリストの十字架によって古い自分が死に、キリストの復活によって新しい自分が生まれることを「新生」や「再生」（ボーン・アゲイン）と言います。コロサイ 3:9-10 に「あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです」とあるのは、「ボーン・アゲイン」を着物を脱いだり、着たりすることに言い換え、例えたものです。8 節には救われたときに脱ぎ捨てた古い着物が、12 節にはそのときに着た新しい着物が書かれています。

二、古い着物

8 節に、脱ぎ捨てたものがあげられています。「怒り」、「憤り」、「悪意」、「そしり」、そして、「恥ずべきことば」です。

「喜怒哀楽」というように、「怒り」は人間の感情の中でも基本的なものです。すべての怒りが悪ではありません。真理を守り、正義と公平を守るための怒りというものもあります。しかし、誤解から生じる怒りもありますから、よく考え、確かめて結論を出すようにしなければなりません。

「怒り」が態度になり、行いになったものが、「憤り」です。家庭内暴力や殺人事件の多くが、「ついカッとなって」と、憤りを抑えきれないために起こっています。忍耐や自制心に欠けるため、怒りが爆発して憤りになるのです。人類最初の殺人もそのようにして起こりました。創世記 4 章に、アベルのささげ物が神に受け入れられたのに、カインのささげ物が受け入れられなかったことが書かれています。その時、カインは自分を反省し、アベルを見習って、ささげ物をささげ直せば良かったのです。しかし、カインは自分を省みることも、他から学ぶこともしないで、自分のささげ物が受け入れられなかったことを怒り、その怒りをアベルに向けました。カインは怒りと憤りに身を任せ、恐ろしい罪を犯してしまったのです。カイン以来、「怒り」と「憤り」は人類の本性となりました。このために多くの人が苦しみを味わっています。

そして、この怒りと憤りから「悪意」が生まれます。「悪意」と訳されていることばは「敵意」とも訳すことができます。それによって、人類の歴史は戦争の歴史となり、いたるところに争いを見るようになったのです。「怒り、憤り、悪意」の次に「そしり」がありますが、これは、人に対する侮辱のことだけでなく、神への冒瀆をも意味しています。多くの人が気付いていないのですが、じつは、人は、人と争うだけでなく、神とも争う者となったのです。

最後の「恥ずべきことば」というのは、卑猥な話のことを指しますが、そういう話でなくても、私たちは、なんと無駄な言葉を数多く口にしていることでしょう。口数が少なくて失敗することもありますが、普通は言葉が多くて失敗することのほうが多いと思います。言わなくても良いこと、言ってはいけないことを口にしてしまいやすい私たちに、聖書は「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい」（エペソ 4:29）と教えています。

人々は「怒り」、「憤り」、「悪意」、「そしり」、「恥ずべきことば」を捨てたいと思うのですが、これらは、人のたましいに染み込み、からだの一部になってしまい、脱ぎ捨てることができなくなっています。それでカバーアップしようとするのですが、隠していても、何かあるたびに、そうしたものが現れてくるのです。しかし、ただ一つ、それを脱ぎ捨てる方法があります。それ

は、そうした本性を持った自分が死ぬこと、そして、新しくされて復活することです。それができるのは、キリストを信じることによってだけです。キリストの十字架が私の罪のためであったと信じる者は、キリストとともに古い自分に死に、キリストが私を救うために死者の中から復活されたことを信じる者は、キリストとともに復活して新しい人となるのです。イエス・キリストの十字架と復活だけが、古い人を死なせ、その身にまとっていたものを捨てさせ、人がほんらい身に持けていなければならない着物を着せてくれるのです。

三、新しい着物

8 節には、脱ぎ捨てた古い着物が五つありましたが、新しい着物も五つあって、12 節に「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい」とあります。

「深い同情心」というのは「憐れみの心」（新共同訳）や「慈愛の心」（新改訳２０１７）とも訳されます。けれどもそれは強い者が弱い人たちを見下してかわいそうに思うといったものではありません。聖書でいう「憐れみ」はそのようなものではありません。自分を他の人と同じ立場において、その痛みを共有する。それが「憐れみ」です。英語の聖書では“compassionate hearts”（ESV）と訳されています。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の直後、被災地で「足湯」が用意されました。震災後、長い間お風呂

に入れないでいた人たちのために、せめて足だけでも暖かいお湯に浸してもらおうということで行われました。ひとりのクリスチャン女性が足湯のボランティアに行きました。震災直後のことで、人々はまだ大きなショックの中にありました。ですから、「震災のとき、どこにいましたか」「家族は大丈夫でしたか」などと、ボランティアのほうから、被災者に何かを尋ねてはいけない、また、被災者のほうから話し出したとしても、それを聞くだけで、コメントを加えたり、アドバイスめいたことをしてはいけないというルールが定められていました。ですから、彼女はキリストのことを語ることはできませんでしたし、ほとんどの場合、足湯は無言のうちに行われました。最初、彼女は、「足湯のボランティアならクリスチャンでなくてもできるじゃないか」と思ったそうです。しかし、彼女は、ひとりひとりの足を洗いながら、主イエスが弟子たちの足を洗われたことを思うようになっていました。聖なる神の御子が罪深い人間の埃にまみれた足を洗われた。自分を見捨てて逃げ隠れするような、頼りにならない弟子たちの足を、腰にまいた手ぬぐいで拭いていかれた。主イエスは、高い立場から人間を憐れんだのでなく、私たちが味わう霊的、精神的、肉体的、社会的苦しみのすべてを味わうため、肉体をとり、人となり、私たちと変わらない立場に立たれたのです。彼女は、そのことを思ったとき、自分はキリストと同じ心で、被災者に向かっているだろうかと考えるようになりました。彼女は、そのボランティア活動によって

キリストの心に触れるというクリスチャンでなければできないことができたのです。痛みの中にある人々と同じ立場で、その痛みに共感する深いレベルでの同情心を身につけることを学んだのです。

この「深い同情心」から「慈愛」（「親切」新改訳２０１７）、つまり、人に対する優しく親切な態度が生まれます。キリストの「憐れみ」の心を知る人は決して高慢になりません。いわゆる親切の押し売りのようなことをして、人をコントロールしようとはしません。「謙遜」と「柔和」を身に着けています。自分の狭い考えに閉じこもらず、違った意見を持つ人にも心を開く「寛容」を身に着けることができます。

「深い同情心」、「慈愛」、「謙遜」、「柔和」、「寛容」、この五つに加えて、身につけるべき、もう一つのもが「愛の帯」です（14 節）。古代の着物はとてもゆるゆるとしたものでした。着物の上から帯を締めなければ、それこそ、締りのないものになりました。私たちは、この「愛の帯」によって、キリストのくださる新しい着物を束ね、それをしっかりと身に着けることができるようになるのです。

服装は民族や文化によって、時代によって、男女の性別によって、また、時と場所によって変化します。しかし、ここで言われている装いは、どこの国の人であっても、どの時代であっても、どんな立場にあろうとも、すべてのクリスチャンが身に着けていなければならないものです。もちろん「身に着けていなければならない」と

いっても、こうした着物を自分で作り出さなければならないのではありません。努力によって買い取るのでもありません。これはイエス・キリストが、恵みによって与えてくださるものです。私たちは、信仰によってそれを受け取り、感謝して身に着けるのです。

「深い同情心」、「慈愛」、「謙遜」、「柔和」、「寛容」、そして「愛」のすべてを持っておられるのは、イエス・キリストだけです。それで、聖書は「主イエス・キリストを着なさい」（ローマ 13:14）、「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです」（ガラテヤ 3:27）と言っています。「新しい服を着る」ことは「キリストを着る」ことだと言うのです。「キリストを着る」とは、私たちがキリストを受け入れたときに、私たちもキリストのうちに受け入れられることなのです。キリストが私たちのうちにおられ、私たちがキリストのうちにある者となるのです。キリストが着物のように私たちを覆ってくださるのです。

多くの宗教では信仰の対象とそれを礼拝する者とは遠くかけ離れています。しかし、イエス・キリストと私たちの場合、キリストを信じる者はキリストに結ばれ、キリストのからだの一部分となり、キリストの命に生かされる者となるのです。そしてそれによって、キリストのご性質が私たちの性質になり、私たちがキリストに似た者へと変えられていくのです。

ですから、「クリスチャンの装い」、それは、私たち

がキリストを受け入れ、またキリストに受け入れられ、キリストのいのちに生かされ、キリストのご性質が私たちの性質となり、私たちがキリストに似たものへと変えられていくことによって、身に着いてくるのです。私たちも、そのようなしかたで、「クリスチャンの装い」をしっかりと身に着けたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、キリストを信じる者に、清く、美しい、キリストのご性質を着せてくださいました。捨てるべきものを捨て、得るべきものを手にする、きっぱりとした悔い改めと信仰の決断へと私たちを導き、あなたが装わせてくださるものをもって、キリストを証しすることができるよう、助けてください。主イエス・キリストのお名前によって祈ります。

Penguin Club
www.penguinclub.net